――――――――――――――――――――――――

――――――――――書評――――――――――

Eric Watkins, *Kant and the Metaphysics of Causality* (Cambridge University Press, 2005, xi+451p.)

鄭　英昊

――――――――――――――――――――――――

本書は、従来の研究とは異なる全く新しい角度から、カントの因果性についての議論を読み解こうとする意欲的な研究である。本書の特徴は次の二点にあるといえるだろう。第一に、カントの因果関係に関する考察を歴史的、思想的背景の中で適切に位置付けることによって、つまり、ただ単に『純粋理性批判』の議論のみに関わるというのではない仕方で、その思想を解き明かそうとする点。第二に、因果性の論証ということで誰もが注目する「第二類推」の性格を、むしろ「第三類推」を重視することによって究明しようとする点である。以下、これらの点に注目しながら、本書の順に沿って著者の主張を確認しよう。

著者によれば、まず第一に、そもそもカントの因果法則の論証をヒュームに対して位置付けようとする従来の理解が誤りである。そうであるとするなら、それが適切に位置付けられる文脈とは一体どういったものだろうか。第一章では、この問題について論じられる。著者は、当時のカントの因果観の思想的背景として、ライプニッツ、ヴォルフ、クヌッツェン、バウムガルテンなどの思想を、因果関係に関する側面を中心に整理する。中でも特に注目されるのが、クルージウスのそれである。そこには、それまでの予定調和や機会原因論に比肩しうる物理的影響説（physical influx）を擁護する議論が見出されるのであるが、特にこのクルージウスの考察に特徴的なことは、諸実体が一つの世界に属するためには、実体間に実在的な関係がなければならない、と主張した点にある。著者はこの議論を特にカントに影響を与えたものとしてとりあげ、また、基本的にはカントもその物理的影響説の流れを汲む者としてとらえるのである。

以上の確認において重要なことは、カントが当時の三つの有力な選択肢（予定調和、機会原因論、物理的影響説）の中で自らの思索を深めていったという点であろう。そして、このようにカントが対立軸として挑んでいたのは、当時のドイツにおける合理主義者であること、そして、カントの思想背景としてクルージウスを強調する点などに著者の解釈の特徴が表れていると言える。

第二章では、以上のような議論を下敷きに、カント自身のいわゆる『就任論文』までの思想的変遷が丹念に辿られる。やや乱暴にまとめるなら、指摘されるべきことは次の三点にまとめられるだろう。

第一に、カントがクルージウス同様物理的影響説をとりながらも、そこに見出される相違点について。カントによれば、実体同士は単にその存在によって実在的関係にあるのではなく、それらの本質を構成する根拠に従って、相互に作用しあうことによ

ってのみ実在的関係を有するのである。つまり、単なる実体の存在ではなく、その実体間の根拠に基づく活動、作用といったものが実在的関係にとって重要な契機となるのである。

第二に、この実在的関係は論理的な関係とは異なるものであるため、それを支配する原則は矛盾律にはとどまらないという点。著者はカントがこの点に気づいていたことに、ある程度ヒュームからの影響を見るのであるが、さしあたっての影響をこの点のみに限定するのである。

第三に注目すべき点は、以上のような説においてカントは常に、「根拠」とそれによる「規定」という枠組みの中で思索していた、という点である。たとえば、いわゆる『新解明論文』における予定調和批判においても、その批判の中心はそこで用いられる根拠と規定の関係が、変化を説明するのに不適切であるという点に向けられている。このことは、カントが根拠と規定というものをどのようにとらえるべきか、ということに既に問題を見出していたことを示すものであろう。

以上の点は、カントが（論理的ではなく）実在的な関係について関心を抱いていたこと、そして、それを根拠と規定という概念的枠組みの中でどのようにとらえるべきか、ということを問題としていたことを示すのである。

続く第三章と第四章において、本書の中心的な問題である『純粋理性批判』におけるカント自身の因果観について具体的な議論が展開される。

著者によれば、『純粋理性批判』の「経験の類推」においては、前批判期からの非連続性（よく言われるように、”Critical turn”が確かにあったということは著者も否定しない）のみならず、その連続性もまた見逃されてはならない。前者の非連続性は、「統覚の統一」や「経験」といったカントによって独特の意味を与えられた認識論的な枠組みによっても明らかである。

しかし、著者が強調するのは、むしろその連続性についてである。前批判期との連続性は特に、規定やその規定の根拠、さらには「規定すること」としての作用、といった概念的枠組みが『純粋理性批判』においてもいまだ見られるということに明らかに表れており、また、依然としてカントが諸実体が一つの世界に属するということはどのように説明されうるのか、という問題に取り組んでいたという事実にもその連続性は表れているのである。このような点を強調することから、著者が、相互作用を扱う「第三類推」を重要視することは理解されるだろう。

以上のような指摘を背景に、著者はカントの因果モデルの確定に進む（第四章）。

まず第一に著者は、カントが原因を出来事だと考えていた、とする誤解を摘発する。多くの論者はヒューム同様、カントが原因と結果の両者を出来事としていることを暗黙の了解としているが、著者はこのような

解釈は不可能であるとするのである。この主張のための論拠もまた「第三類推」つまり、相互作用に関する考察を基礎とするのである。著者は、原因も結果も出来事であるとするような因果モデルをとるなら、「第三類推」を理解することが不可能である、と主張するのである。同時に存する出来事同士が、互いが互いの原因であり、かつ結果であるなどということを相互作用においてカントが論じていたとするのは、非常に無理のある解釈であろう。しかしながら、そうだとするなら「第三類推」を理解可能にし、かつ「第二類推」にも共通して適合する因果関係のモデルとは一体どのようなものであるか。

著者によれば、カントが拠って立つ因果観は次のようなもの、すなわち、諸実体は causal power（すなわち、カントの言うところの Kausalität（原因性））を行使することによって、互いにその状態を規定しあう、というものである。さらに、著者がこのようなモデルに見る特質を簡単に紹介しておく。まず、実体と規定（あるいは規定の変化）の関係、言いかえれば原因と結果の関係は、規定するものと規定されるもの（あるいは、能動と受動）という非対称性を含意するものである。また、このモデルに登場する causal power は、実体それ自身でもなく、また規定に属するものでもない、何か無規定的なものである、と考えられねばならない。この因果モデルは、「第二類推」以外の箇所、すなわち第三アンチノミーの理解に大きな役割を果たすのである（第五章）。

たとえば、原因が出来事ではない、とするこのモデルは、原因をある種の実体、あるいは規定するもの、としてとらえることを可能にする。このことから、ある行為に対して、その原因として欲望といったような精神的な出来事ではなく（というのも無規定的な作用それ自身は出来事ではなく、規定されたものとしての系列に組み込まれなくてもよいのだから）、自由な主体を想定することも可能となるのである。

最後に第六章で、ヒュームへの応答という側面がとりあげられる。先にも述べたように、そもそも著者は、カントがヒュームを論駁するために第二類推を展開したとは考えていない。また、このことはこれまでの考察によっても支持されるものである。つまりカントは因果関係の理解において、ヒュームを論駁できるほど、ヒュームと同じ前提を共有してはいないのである。しかしながら、これも一つの応答とすることは可能である。すなわち、それはヒュームとは全く異なる前提の下で、全く独自の体系的、包括的な因果了解のあり方を提示する、という形での応答として解すこともできるのである。

以上が本書の概要であるが、最後に評者として簡単に二点指摘をしておく。第一に、著者独特のカントの因果モデルの理解は説得力を持つものではあるが、問題は、このようなモデルを果たしてカントは第二類推

で証明しえているのかということである。著者も自身が示すモデルは証明部分ではない箇所にしか見られないことは認める以上、このモデルと証明との関わりはぜひとも考察されるべき事柄であろう。つまり、たとえば causal power といったものを第二類推のテキスト（特にその証明部分）に、もっと言えば時間関係や経験の可能性の条件といった問題の理解に果たして合致させうるのか、という点は問われて然るべきであろう。

第二に、紙幅の都合で詳論はできないが、著者のような立場からは、いかにして因果連鎖を考えうるのかという点も、ぜひとも示してもらいたい。というのも、原因と結果との間に非対称性、あるいは截然とした区別を設けるなら、結果（出来事）が翻ってそれ自身で何らかの原因（これは著者によれば実体でしかありえないはずである）になりうる、ということは自明なことではなく、さらに説明を必要とするものになるはずだからである。もちろん、このような問題は、カントはそもそも因果連鎖を積極的に主張しているのではない、とすれば解消されるであろうが、そのような議論も本書では見られない。

しかしながら以上のような問題点は見られはするものの、本書の考察は従来の伝統、つまり客観的な時間関係という大きな枠組みにとらわれるあまり、カントの因果モデルすら問わずに自明視してきた英米圏の伝統に、大きな挑戦を突きつけるものと言えるだろう。また、カントの因果モデルを当時のドイツの思想状況から裏付けるという試みもある程度有効であるように思われる。これらの点に関しては、本書は非常に興味深い試みを示すものであり、今後の第二類推研究においても影響を持つものと思われる。